

受講番号 18001 学校名 室戸高等学校 氏名 丸岡 恵都子

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 19名
 科目名 英語 単位数(授業時数) 4時間 使用教科書名 Power On English 東京書籍

クラスの様子・特徴

2つのホームを3つの習熟度で分けた中位レベルのクラスである。英語に対する苦手意識や嫌悪感が強く、基礎学力も決して高くないが、授業姿勢は概ね良好で、音読等での声も比較的出ている。よく発言する男子1名が全体の活動を牽引してくれている。

問題の確定

英語は難しい、覚えるのが大変という固定観念が強い。活動に自信を持って取り組めないため、解答や説明を待つ生徒が多い。

予備調査

A 授業の観察

9月、クラス替えにより新メンバーで授業開始。女子が多くおとなしかった1学期後半と異なり、元気なクラスに。カードによる単語等のチェック、ペアでの語彙確認などがゲーム感覚で取り組むが、綴りの定着には不安がある。また音読に抵抗を感じる生徒もいる。

B 生徒による授業評価

2学期当初のアンケートでは、「英語があまり好きでない、嫌い」63%。「授業が分からない」(あまり、全く双方で)68%。1学期の取り組みを意欲的、あるいは真面目に頑張れたと自己評価した生徒は47%。また音読を好きと答える生徒は42%であった。

C 学力データ

基礎基本に不安のある生徒が多く、文法では代名詞やbe動詞さえも十分に習熟できていない。段階を踏んで時間をかけながら演習をすることで、限られた範囲であれば8割が理解できるまでになった。この理解をいかに学力として定着させるかである。

リサーチ・クエスチョン

英語に対する苦手意識を取り除き、活動に生き生きと参加させながら、基礎力をつけていくためには、指導をどのように工夫すればよいか。(結構英語がわかる、自分たちにもできるかもという自信に繋げるための授業展開をさぐりたい)

仮説・実践・検証

仮説1

わかる語が増えたという楽しみを感じさせながら語彙の増強を図ることで、英語を読むことへの抵抗が少なくなるのではないかと。

実践1

単語・熟語をカードを使用して授業開始時に確認し、必要に応じて小テストを行う。テストで間違えた語はその場でもう一度数回書いて記憶に残していく。それぞれの語に接する機会を増やし、見て、聞いて、発音して、書いて覚えることにより定着を目指す。また発音と綴りの関係を意識させることで、覚える際の負担を軽減し、新しい語にも応用することで習う前に読めるという自信にも繋げる。

検証1

反復学習により単語を覚えることへの抵抗感はいくらでも和らいできたように思う。語句の暗記を苦手とする生徒が37%から16%に減り、授業について様々な活動の中から好きなものを複数選択させる問では、半数近くが「単語を覚えること」と答えた。ただ、読めて意味もわかるのだが、つづりの定着には不安がある生徒もおり、家庭学習の充実を今後指導していきたいと考えている。

仮説2

リスニングとフレーズリーディングに力を入れることで、きれいな日本語に捉われることなく語順どおりに英文をつかむことができるようになり、英語の発想の展開への理解もすすむのではないかと。ひいては自身で英文を作る力へも繋げていけるのではないかと。

実践2

各パートの導入にリスニングによる大意把握、キーワードとなる語句の聞き取りを行う。フレーズリーディングについては本文にスラッシュを入れてまとまりを意識させ、主語・動詞を確認しながら読み込ませる。特に覚えたい表現について英文の中から語句探しをさせ、音読を繰り返して定着を図る。訳についてはスラッシュごとの部分訳に取り組み、語順どおりに意味をとる練習をする。なお和訳も渡すようにはしてある。

検証2

半数近い生徒がリスニングを好きな活動として挙げており、9月時点よりも割合が高くなっている。取り組みにも意欲的で、積極的発言も見られる。次に来るフレーズを答えとする質問を投げかけながら読解を進めることで、前から意味を取る練習には慣れてきたようだが、それが英文構造の理解まで進んでいるかどうかの検証はできていない。また自分で切れ目をつかみながら読むことが目標であるが、そこまでの指導も十分ではない。

仮説3

「習うより慣れる」の形式で、shadowingや、音読筆写、read and look upなどの音読活動を繰り返すことにより、英語を声に出すことに自信が持てるようになり、また英文の構造の理解にもつながるのではないかと。

実践3

単なる反復練習で意欲をそぐことがないように、仮説に挙げたような形で英語を声に出すことを様々に取り入れる。全体、ペアと形態も変えながら、1時間に数回は音読を行う。また全体の中ではなかなか見えてこない個々の習熟度を確認するため、2学期より音読テストを生徒に課した。音読の意義と効果を折に触れて伝えながら、書いて、声にして習得させる。早読みでは速度を記録していくことで自己の成長を具体的に数値で実感させる。

検証3

9月の調査では英語を声に出して読むのが「嫌い」とする生徒が4人いたが、12月には0となり音読への抵抗が薄れてきたようで、「好き」とする生徒が42%から53%に若干増加した。ただ元気な声が出せるのは半数程度であり、自信を持って読めているかという疑問が残る。音読テストでは、英文の難易度が上がったにもかかわらず、2度目には読めずに詰まる語が減少してスムーズになり、テストにかかる時間も大幅に短縮された。

研究の成果

12月のアンケートでは、英語が「嫌い」とする生徒はいなくなり、58%が「好き」、「割と好き」と答えた。また英語が「全く分からない」が6名から1名だけになり、授業をほぼ理解できると答える生徒が増加した。英語に取り組む姿勢も半数以上が「あまりがんばらなかった」「さっぱりだった」という自己評価から、8割以上が肯定的な評価へ向上し、英語に対する嫌悪感や強い苦手意識はある程度克服されているように思う。それぞれの仮説の実践についても比較的前向きな取り組みが見られたのではないだろうか。ただ、生徒たちの学力向上につなげることができたかはまだ十分に検証できていない。

今後の授業改善の課題

語彙の習得を最初の課題として取り組んできたが、意味がわかって読めるだけでなく、用法を理解し実際に使えるようにするための指導がまだまだであると感じている。それは語句だけでなく、音読等についても同様である。基礎学力の向上に向けて、まずは与えられた教材を確実に自分のものにし、自己表現のためのストックにしていけるような展開を今後は工夫していきたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

0887-22-1155

電子メール

etsuko_maruoka@kt2.kochinet.ed.jp